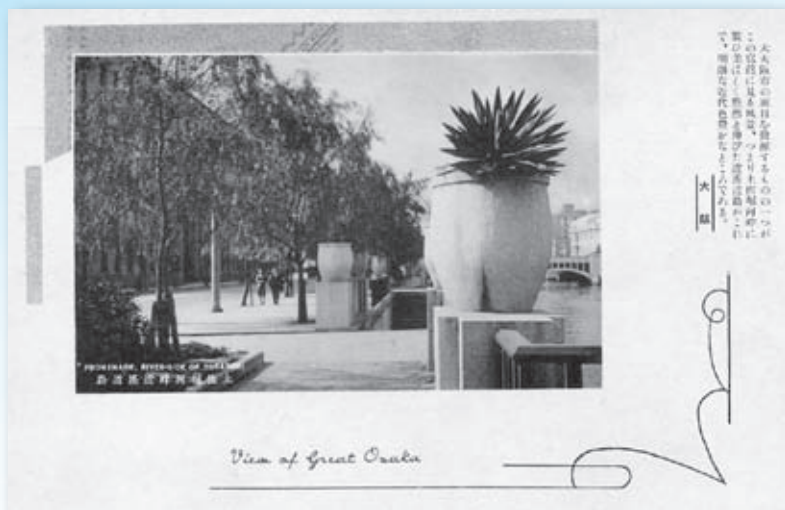


おおさか
KEY
ワード
第24回

ロマンチックに中之島公園を描く

すべてはシルエットのなかに



戦前の絵葉書(ビュー・オブ・グレートオオサカ)

煌々と月あかりに照らされた豪華な噴水。そのむこうに近代建築のシルエットが連なる夜の公園風景。パリを舞台にレスリー・キャロンが主演し、9部門でアカデミー賞を受賞したミュージカル映画『恋の手ほどき』(1958年)にあるようなロマンチックな情景だが、描かれているのは昭和8(1933)年の中之島公園である。画面中央の橋が現在の「ばらざの橋」、噴水右横の尖塔がかつての大阪市庁舎で、円いドームが二つ見えるのが大阪市中央公会堂である。

中之島公園は、明治24(1891)年に大阪市営第1号の仮公園として開園し、明治32(1899)年に正式な中之島公園となった。そのころの中之島は旧難波橋の西側までしかなかったが、大正4(1915)年に天神橋上流まで埋め立てられ、噴水のある整然とした西洋式の幾何学的庭園が建設される。有名な建築家の武田五一の設計で野外音楽堂も建てられた。絵には描かれていないが、噴水のこちら側である。

江戸時代には、諸藩の蔵屋敷が薨を連ねた中之島だが、近代になって大阪市の政治経済、文化芸術の重要な拠点となった。昭和はじめにあった施設を列挙してみよう。市庁舎、日本銀行、中央公会堂、府立図書館、大阪帝国大学、新大阪ホテル、朝日新聞社、朝日会館のほか、大阪駅前に移転する前の中央郵便局も中之島にあった。現代も大阪市立東洋陶磁美術館、国立国際美術館、フェスティバルホール(建て替え中)などがある。

それらの建造物群が生み出す光景は、かつての蔵屋敷時代とは異なる最先端のモダンな都市風景だった。洋画家の小出橋重(1887~1931)は『めで

たき風景』(創元社、1930)の随筆「上方近代雑景」で、「大阪の近代的な都市風景としては、私は大正橋や野田附近の工場地帯も面白く思うが、中央電信局中之島公園一帯は先ず優秀だといっている。なおこれからも、大建築が増加すればするだけその都会としての構成的にして近代的な美しさは増加することと思う。」と記している。

大阪市も、新しい都市建設の理念に「都市美」という言葉をとり入れ、まちづくりに勤しんだ。例えば中之島の対岸だが、淀屋橋以西の土佐堀川沿いの道路を市民が散策する「逍遙道路」として整備し、モダン都市・大阪の美しい空間を誰もが楽しめる憩いのプロムナードとした。「逍遙道路」の整備完成は昭和12(1937)年で、それを自慢して「ビュー・オブ・グレートオオサカ」と題された絵はがきが何種か発行されている。

表紙の作品は京都の版画家・浅野竹二(1900~1998)が昭和8(1933)年に出した「新大阪風景」シリーズのうち《中之島公園月夜》である。昔の名所絵とは異なる新しい大阪の都市の姿をテーマとしたこの連作では、ほかに貨客船でにぎわう築港や、ネオンに飾られた道頓堀の夜景などもとりあげている。

現在の中の島は、建物の重みで中之島自体が沈んでしまうのではないかと、といった妄想を抱きそうになるほど高層建築がたくさん建ち並んでいる。土佐堀川と堂島川という二つの河川にはさまれた貴重な空間であり、景観との調和の美しさを意識した、文化的で市民の憩える地域として発展していったらいいと思う。